

古賀詳二の一日一話 その3

(2009年12月24日～2010年11月1日)

副題

「理想と現実の狭間の中で夢を諦めるな」

1 2月24日 「人を育てるから作る（1）」

平成12年3月21日に「人材育成」を経営の主軸に創業し、年明けの3月20日で丸10年になる。これからの新たな10年の経営の主軸をどうするか考えた。松下幸之助は「松下電器は何を作る会社かと問われたら、まず人を作る会社と答えていただきたい。しかる後に、電気製品も作る会社だと答えていただきたい。」と言っている。私は「人を育てる」を主軸に考え、松下幸之助は「人を作る」を主軸に考えている。その違いは何かと深く自問した。

辞典（三省堂 大辞林）で

「育てる」を引くと

（1）生き物が成長するよう世話をする。

「子供を一・てる」「雛（ひな）を一・てる」「稲を一・てる」「いかにもして一・てて人になして見せ給へ／平家 6」

（2）次第に大きくなるようにする。

「みんなの力で会社をここまで一・ててきた」「愛情を一・てる」

（3）能力・資質をのばすように教え導く。一人前になるようにしこむ。

「後継者を一・てる」「弟子を一・てる」

（4）おだててそそのかす。

「強い男と一・つれ共／浄瑠璃・聖徳太子」

〔「育つ」に対する他動詞〕

同様に

「作る」を引くと

（1）原料・材料を加工したり組み立てたりして、形のある物をこしらえる。製作する。製造する。

「洋服を一・る」「米から酒を一・る」「魚を一・る（＝刺シ身ナドニスル）」

（2）建築工事・土木工事などを行なって築く。

「道路を一・る」「庭園を一・る」

（3）栽培する。耕す。

「畑に麦を一・る」「あしひきの山田一・る子／万葉 2219」

（4）書類などを作成する。

「契約書を一・る」「一覧表を一・る」

（5）子供をもうける。

「当分は子供を一・らない」

（6）これまでなかったものを生じさせる。

（ア）団体を創立する。部局を新設する。

「会社を一・る」「組合を一・る」

- (イ) 言葉を新たに生み出す。作り上げる。
「ユートピアというのはトマス＝モアの一・った言葉だ」
- (ウ) 文章・文芸作品、音楽作品を創作する。
「詩を一・る」「曲を一・る」
- (エ) 記録を打ちたてる。
「新記録を一・る」
- (オ) 財産・借財を築く。また、現金を得る。
「財産を一・る」「借金を一・る」「書画を売って金を一・る」
- (カ) 好ましい状態のものに変える。
「丈夫な体を一・る」「理想の社会を一・る」
- (キ) 人との親密な関係を生じさせる。
「多くの友だちを一・る」
- (ク) 時間を都合して、ある事のための時間を生み出す。
「暇を一・る」「機会を一・る」
- (7) ある形にする。
「列を一・る」「指で丸を一・る」「鬼の顔などの、おどろおどろしく一・りたる物／源氏(帚木)」
- (8) 表面的にある状態にする。
(ア) 顔や容姿を美しく整える。
「若く一・る」「顔を一・る」
- (イ) とりつくろう。
「お客の前では笑顔を一・る」
- (9) ある結果を生じさせる。
「罪を一・る」「老法師のためには、功德を一・り給へ／源氏(若菜上)」
- (10) (「時をつくる」の形で) 雄鶏が朝早く大きな声で鳴く。時を告げる。
「雄鶏が時を一・る」
- (11) 文字をある形に描く。
『峯』はまた『峰』にも一・る」
- [(3) 以下は「作る」と書く]
[可能] つくれる

「育てる」と「作る」は同じように感じるがしかし、「育てる」は本人から見て受動であり、「作る」は本人から見て能動に感じる。社会人である以上、主体は自分でなければならない。「学校は人を育てる」が正しくて、「会社は人を作る」が正しいのではないのかと。このように考えるとこれまでの当社は給与を払って知識や技能を教える営利法人であったといえないだろうか？これまでの方法だとある程度までは人は育つがそれ以上の技能や人格

のある人には作れないのかもしれないと自責している。(つづく)

12月28日 「人を育てるから作る(2)」

話を続けよう。多くの人知っている明治時代の文豪の夏目漱石と芥川龍之介の人生を対比させることによって「作る」の意味を掘り下げたい。彼らには多くの共通点がある。夏目漱石(本名:金之助)は明治維新の前年である慶応3年1月5日に牛込馬場下横町に生まれた。彼は東京帝国大学英文科を主席で卒業する秀才であった。しかし、彼は傲慢、自己本位、悲観主義者、神経衰弱、胃潰瘍などの性質や病気に悩んでいた。「漱石」は頑固者という意味であり、自他共にその性質を認識していた。

明治28年高等師範学校の英語教師になるも学生から授業が分からないとボイコットされ、松山の愛媛県尋常中学校の英語教師として赴任したが松山になじめず、明治29年に熊本市の第五高等学校に赴任した。明治33年に文部省から英国留学を命じられるも孤独による神経衰弱で、漱石発狂とのうわさが流れ、文部省から急遽帰国が命じられた。失意の中、35歳で小説「吾輩は猫である」を執筆する。明治40年に40歳で東京帝大と一高の講師を辞任して朝日新聞社に入社した。その後、エゴイズムと人間愛をテーマにした「彼岸過迄」、「行人」、「こころ」を執筆した。明治43年に大吐血をおこし、生死の境から戻った彼は「則天去私」が生きる理想と考えた。彼は他人との交流が下手な人間でうつ病であったと推測される。その苦しみに向かい、それを解決しようと努力し、「則天去私」が正しい生き方と悟るも大内出血を起こし「明暗」執筆途中で50歳で死去した。夏目漱石は自分と向かい合い、生きることに真剣に悩み苦しむ、それを超えようとした。私は「自分を作る」をこのようなことと考える。

一方、芥川龍之介は明治25年3月1日に現在の東京都中央区入船で生まれる。彼は東京帝国大学英文科を次席の成績で卒業した秀才であった。短編小説を得意としていた特徴を持つ。昭和2年9月の菊池寛の言葉によれば、「今年の彼の病苦は、可なり彼の心身をさいなんだ。神経衰弱から来る、不眠症、破壊された胃腸、持病の痔などは、相互にからみ合つて、彼の生活力を奪つたらしい。かうした病苦になやまされて、彼の自殺は、徐々に決心されたのだらう。」と書かれている。昭和2年7月24日に「僕の将来に対する唯ぼんやりした不安」という理由で自殺した。

漱石と龍之介は同じ性格であったようだ。しかし、生きる姿勢が違った。漱石が己を作ろうとしたが龍之介は己から逃げた。人間は困難に直面し、それを超えようとしているときに人間が作られるのである。「育てるより作る方」が人間らしい生き方ができると私は考える。(つづく)

1月8日 「人を育てるから作る(3)」

私は昭和30年、長崎県の島原半島の母親の実家である小浜町で生まれた。この年に生まれた有名人はマイクロソフト創業者のビルゲイツ、芸能人の所ジョージ、明石家さんま、郷ひろみなどがある。政治は自由民主党と日本社会党の二大政党制(55年体制)が始ま

った。この年に1円のアルミ硬貨が発行、アーモンドグリコが発売され、石原慎太郎の「太陽の季節」が発表され、三種の神器（電気冷蔵庫、電気洗濯機、テレビジョン）が流行語になった時代である。

私が生まれる頃まで母親の実家は古くから林業と製材所を営み、戦後の農地改革の後でも大変裕福であったようだ。父親は母親の実家で働いていた。昭和20年の敗戦前後の時代にお嬢様と使用人の結婚は許されることも祝福されることもなかった。そこで彼らは駆け落ちして、母親の親族に許してもらったと聞いている。私が誕生した時には未来に暗雲はなかった。しかし、1年後に母親の不注意により、私は不幸な十字架を背負い、生きていくことになる。また、祖父は優しい人柄で知り合いの事業の保証人となり、私が生まれた数年後にその会社が倒産し、その負債を背負い母親の実家の資産はなくなった。その後、家族は父親の実家である諫早に引っ越した。私は何時も貧乏な生活しか記憶がない。

妊娠すると母子健康手帳を役所から貰うのは昨今も変わらない。母子健康手帳は子供の成長記録や予防接種の状況などを記録する。私が1歳になったころ、40度前後の高熱が三日三晩続いたそうだ。それはポリオウイルスに感染したことによる発熱であった。ポリオウイルスが感染して、脊髄神経の灰白質をおかすため、はじめの数日間は風邪を引いたような症状があらわれるが、その後急に足や腕がまひして動かなくなる病気であり、私は4歳ころまで歩行できなく、5歳ころにやっと歩くことができた。私は幼稚園に行くこともなく、小学1年生に入学ころの記憶が最も古いから幼児期の記憶など全くない。私の左足は筋委縮していたので、その頃はとともびっこを引いて歩いていた。それが他人とは違うことに引け目を感じ、劣等となり、劣等感は増幅され、他人と同等ではないと強く感じていた。子供たちからも対等な扱いをされなかったような気がした。当然としての結果、人間嫌いになっていった。

母親から厳しく言われていたので小学校は一度も欠席したことがない。行くことが目的であり、勉強が目的ではなかったので、夏休みの宿題と冬休みの宿題以外に家で鉛筆を握ったことはなかった。学校から帰るとカバンを玄関に置き、すぐに裏山や川に出かけ、一人で毎日日が暮れるまで遊んでいた。自然は私の心を癒し、また自然の万物が私にいろいろなことを教えてくれた。毎日、山や川や野原や海に出かけ遊んでいると自然に身体が鍛えられ、運動機能が強化されていった。高学年になると運動会の50m走でもびりになることは無くなっていった。徐々に人間を嫌う気持ちは薄らいでいった。しかし、劣等コンプレックスは常に心の中にあつた。その頃には近所の友達と砂利道を裸足で走りまわっていた。たまには尖った砂利で鋭利な刃物で切ったように足裏を深く切つてこともあるがしかし、それでもめげずに走り回っていた。小学校6年の時、町内対抗のソフトボール大会で優勝し、市内大会に出場できたときはとても嬉しかった。市内大会の一回戦で敗退したが私は3打数2安打であり、その結果に満足した。

中学校に入ると小学校より家から遠かったのでサイクリング用の自転車で通学した。劣等コンプレックスを克服するために水泳部に入部した。練習が厳しかったが皆の同じ練習

をこなした。クロールと平泳ぎは他の部員と同等の記録がでるようになったがドルフィンキックに必要なキック力がなくバタフライはどうしてもできなかった。委縮した左足を見せたくなく何時も水パンを履くのが嫌いだったが目的のため辛抱した。2年生になったとき、水泳部の更衣室で部員が私の悪口を言っているのを聞いて、そのことにショックを受けて、退部した。後で考えると浅はかな行為であったことを後悔した。人間として未熟な彼らにとって何気ない言葉であったのだろうが受け側には大きな衝撃と心の傷になることを知らなかったことは明白である。相手の事を配慮することしないで言動する大人も沢山いることは現実であり、悲しいことでもある。

その後、野球部に入部したが部員が多く、外野で素振りと球拾いの毎日と2年生から入部したので友達ができなく、半年くらいで退部した。中学3年になると進路のことを担任の先生から聞かれ、就職はとても恐怖に感じ、大学への進学まで考え普通高校に入学するために猛勉強した。自分で決めたことなので言い訳はできなく、小学校と中学の8年の遅れを取り戻すためにその1年間は人生でもっとも勉強した。勉強の成果は成績に直結し、また目標の高校に合格したときには大変嬉しかった。目標や目的を持つと集中力が増し、効果的な勉強ができると思った。

当時の中学校にも不良グループがいたが私はそいつらが嫌いであった。嫌いな理由は集団で弱い者いじめしているうわさがあったからである。ある日、学校の廊下でそのグループの番長を睨めつけて言った。「お前より強い輩とけんかしろ、弱い者いじめするな」と言い切った。それから、番長は私に会うたびに笑顔で挨拶するようになった。後日不良グループの輩から聞いたことだが「古賀には手を出すな」と番長は手下に指示していたようだった。私はその頃から弱い者をみると助けたいという思いは今の経営に繋がっているであろう。

中学3年生にもなると女の子を好きになるのも自然なことである。同じクラスの学年で一番可愛いと噂されている子を好きになったが劣等コンプレックスから「好きだから付き合ってください」という言葉をその子に言えなかった。偶然にも高校1年生と2年生と同じクラスになったがやはり勇気を持つことはなかった。人生で劣等コンプレックスを持って、生きることは最大の不幸であることをその時は知る由もない。

高校は中学より優秀な人材が集まっていたので学習のスピードが違った。しかし、中学3年の勉強の効果で入学当初はクラスで上位の成績を残したが勉強では劣等コンプレックスを治すことはできなかった。なんとか健常者と対等になりたいという思いがさらに強くなっていった。一番下半身を鍛えるために柔道を選び、入部した。その当時の体重が約45kgで部員の平均体重が70kgであり、他人から無謀無茶と言われても過言でなかった。一生劣等コンプレックスを持ったままただ生きることが無意味に感じた。だからこそ、挑戦しなければならなかった。幸いにも柔道部の監督は町道場の師範で8段と柔道に精通し、人格を持った人で私に大変優しくしてくれた。先輩や同級生たちも非常に優しく、同等に接してくれた。練習も同等に扱ってくれたおかげで、地獄の練習が毎日続いた。家に

帰ると風呂と食事の後は爆睡した。復習や宿題などできる時間はなかった。当然として成績は急降下した。それを見かねた担任はクラブ活動をやめた方が良いとアドバイスしてくれたが人生の表面でしか見えない人間には分からないこともあると丁重にアドバイスを断った。高校2年までは同じ状況が続いた。高校3年になるとクラブ活動も楽になったがもう国立大学に入れる成績ではなかった。卒業するときに監督から「3年間やり遂げたな、お前は立派な人間だ」と褒めてくれたことが大変嬉しかった。最後まで遣り通すことの意味を深く理解した。人生に不可能はない。これが私の信条となった。私立大学に行けるお金がなかったので一浪して大分大学工学部組織工学科（システム工学）に合格し入学した。この頃には私の劣等コンプレックスはかなり薄らいでいた。

（つづく）

1月10日 「人を育てるから作る（4）」

人類はおよそ700万年前にチンパンジーから進化して、アフリカの熱帯雨林から草原へと移り住んだ。なぜ、人類は進化しなければならなかったのか？熱帯雨林の縮小が原因したと考えられているがそれから人類は過酷な環境で生きていかななくてはならなくなった。そのために、脳が発達した。つまり、困難の解決こそが知恵なのである。

しかし、現代社会は知識が豊富に反乱し、社会秩序が整理され、科学技術や医療技術が発達し、肉体的に苦しむことが少なくなった。死が遠くなった。それは大変良い事だが、生きること、病気、死に対する恐怖が少なくなり、また生きることが社会が保障するようになり、隣人との関係をも疎んじるようになった。これが多くの人間が生きる知恵を駆使しなくなったり、孤独を感じるようになったのではなかろうか？人間は肉体的に弱い動物であるからこそ一人では生きていけない。だからこそ集団を作り、生きるのである。そのことが非常に大切である。身勝手な行動は集団から外される。今もあるのか知らないが日本には「村八分（日本の村落の中で掟や秩序を破った者に対して課される消極的制裁（共同絶交）行為についての俗称。）」という言葉がある。皆が孤独を感じなく、誰とでも笑顔になるためにはどのようなことを考え行動すればよいだろうか。それを一人だけの勉強や学習では理解できない。多くの古人が生きることに苦悩し産んだ言葉を学び、それを実践することである。

私の人材育成の最終目標は「人のために生きる人を作る」ことである。人のために生きる人は幸福な人生を過ごすことができる。「仁（同義語に愛、慈悲がある）」が人間として生きる基本である。それを会得するためには次のことを実践することである。

1. 常に笑顔を絶やさない。
2. 素直な気持ちで見て、考えて、言葉を使い、正しく行動し、不動心を作る。
3. 自分の弱点を克服する。
4. 自分に与えられた使命や目指す目的に対して、正しく励む。
5. 困難に立ち向かい、逃げない。
6. 常に相手の立場に立って考える。

7. 弱い者を励まし、助ける。

以上

2月9日 義務と権利

民主党政権の鳩山内閣総理大臣が1月29日の施政方針演説でマハトマ・ガンジーの「七つの社会的大罪」を引用し、毎月1500万円の小遣いを実母からもらっていた人が労働なき富が罪悪であると自慢げに話したことに厳しい批判を浴びた。裕福な環境で何不自由なく暮らしてきた苦勞を知らない生きることの本質を知らない知識人の弁論に多くの人が嘆いただろう。鳩山首相にはこれを引用するに値する人格がない。

10月2日が「ガンジーの日」としてインドの国民の休日になったノーベル平和賞の候補に5回も挙がったが固辞した偉大なる政治指導者のマハトマ・ガンジーの「七つの社会的大罪」は次のものである。

- | | |
|--------------------------------|----------------|
| 1. Politics without principle | 理念無き政治 |
| 2. Commerce without morality | モラル無き経済 |
| 3. Science without humanity | 人間性なき科学 |
| 4. Worship without sacrifice | 犠牲（献身）無き
信仰 |
| 5. Wealth without work | 労働無き富（不勞所得） |
| 6. Knowledge without character | 人格無き知識（教育） |
| 7. Pleasure without conscience | 良心無き快樂 |

「七つの社会的大罪」の起源になっているのが6世紀後半にグレゴリウス1世により制定されたキリスト教の七つの大罪（傲慢、嫉妬、憤慨、怠慢、強欲、暴食、色欲）がある。仏教では煩惱と言われ、煩惱は貪欲（むさぼり求める心）、瞋恚（怒りの心）、愚痴（真理に対する無知の心）慢（他人と比較して思い上がる心）、疑（真理に対して思い定むることなく、まず疑ってかかる心）、悪見（誠の道理を知らざる心）の六つからなる。先人たちが苦勞して得た知恵を理解し、実践している人や実践しようと努力する人は極めて少ない。悲しいことである。

祝福とは1. 幸福を喜び祝うこと。また、幸福を祈ること。「結婚を一する」「前途を一する」2. キリスト教で、神の恵みが与えられること。また、神から与えられる恵み。呪詛（じゅそ）とは特定の人に災いがかかるように神仏に祈ること。と辞書にある。

祝福と呪詛との関係は義務と権利との関係に酷似している。つまり 義務は奉仕の気持ちを持つから、それは祝福される。権利は略奪に等しく、また孤独であるゆえに呪詛である。日本国憲法に勤勞と納税は義務と書かれている。また、選挙も同じ日本国民の義務である。これらには必ず前向きな姿勢と努力と感謝が必要である。一方、自由及び権利は不

断の努力によって保持されなければならないのに、努力なしの自由と権利を主張する者が多い。国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利とひとしく教育を受ける権利を有すると憲法にあるが、これはすべての国民の勤勉・勤労による互助である。これだけ国家財政が破綻状態にあるにも関わらず、勤勉・勤労義務を怠り、要求する権利だけを主張する堕落している者が多い。

私は経営者であるが経営破綻しても何も見返りやその後の生活を保障されることはない。経営者が強い奉仕の精神を持たなければ会社経営はできない。一方、社員は労働基準法等に手厚く守られている。経営者は雇われている人より技能と人格は格段に上である。しかし努力しても昨今の不況による経営破綻で自己破産もしくは自殺する経営者は少なくないだろう。リストラされる多くの社員は過去において勤勉・勤労を怠った者であり、また義務を怠った者でもある。その辺を十二分に理解する必要がある。どんな仕事でも勤労することに感謝し、周囲から祝福される人間であってほしい。義務を果たす人には天使が近づき微笑み、権利を要求する人には悪魔が近づき微笑む。

2月12日 「好きと嫌い」

「好」は女性が子供を抱き慈しむ姿を書いた象形文字を起源として、「心がひかれること」「気に入ること」等の意味に使われている。一方、「嫌」は「兼」が音（ケン）を表すとともに、二本の禾（稲）を併せて手に持つ形を表し、二本持つ姿は一本持つ姿より不安定・不十分・不満足の意味を表す。そこから転じて飽き足りぬという意味の「兼」に、人間一般を代表して表す漢字「女」がついて、人間において飽き足りぬこと、つまり「きらう」の意味を表すようになった。

好きはプラス思考であり、嫌いはマイナス思考である。可愛いは好き、醜い嫌いであり、利益をもたらす人は好き、不利益をもたらす人は嫌いといった感情は自然なことである。

民主党の小沢幹事長は秘書が政治資金収支報告書の記載ミスを犯しただけでまた私はその事実を知らなかったと、最大の利益者に関わらず本人は最低の道徳である法律には触れていないと弁明していることで多くの国民から嫌われかけている。世間を騒がしているこのニュースは老子の「天網恢恢疎而不漏（てんもうかいかいそにしてみらさず）：天が張りめぐらした網は広く、目が粗いようだが、悪人・悪事は決して取り逃がさないということ」を思い出させる。私は昨年の衆議院議員総選挙では民主党に投票したが、今回の参議院総選挙では民主党には絶対に投票しない。

女性はどんな男性に好感を持つか。1. 優しい人 2. 正直（誠実）な人 3. 笑顔が絶えない人 4. 清潔な人 5. 教養のある人 6. 努力する人 7. 相手を成長させる人 8. 友達が多い人のようである。反対に嫌われる男性は上述の逆であることは言うまでもない。明後日はバレンタインデー、貴方はいくつチョコレートを貰えますか？

私は不平不満を言う人は嫌いである。居酒屋で行くと隣の席にいる客が同僚と会社や上

司の悪口を言いながら酒を飲んでいる。私は心の中でそこまで嫌いならば退職すればよいと叫ぶ。悪口は発展も成長もない。世の中は不合理なようで合理的である。その理屈を理解している人は少ない。悪口をいうより現状の問題点を分析し、課題を整理整頓し改善提案をすれば、良い。そうすると自分が成長できる、また、会社も良くなる。暗い暗いと不平不満を言う前に自ら明りを灯そうではないか。

現状のあなたは周りに好かれていますか？もし、嫌われていると思うならば、襟を正し好かれるように努力しましょう。

3月2日「契約と祝福（1）」

私は近頃旧約聖書を読んでいる。私はこれまで仏教や儒教の考え方を学び、慈悲と仁に基づいて経営してきたがどうもしっくりこない面があった。そこで、西洋の考え方に何かヒントはないかと聖書を読んでいる。旧約聖書はユダヤ教、キリスト教及びイスラム教のバイブルである。そんなことはみんな知っているだろう。

ちなみに、私に神の存在を信じるかと尋ねられたら、私は答える。私は神や仏は実在しないのであって私の心の中には存在しないが神や仏を信じるすべての者の心の中に存在すると考えていると。

仏教では神（仏）との契約は存在しないがユダヤ教、キリスト教及びイスラム教では神との契約が信仰の中核となっている。神との契約を守る者は祝福され、違反する者は呪われるが基本である。

実際に旧約聖書（1955年口語訳旧約聖書）創世記第6章のノアとの契約では次のようにある。

6：5 主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。 6：6 主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め、 6：7 「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、這うものも、空の鳥までも。わたしは、これらを造ったことを悔いる」と言われた。 6：8 しかし、ノアは主の前に恵みを得た。 6：9 ノアの系図は次のとおりである。ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。 6：10 ノアはセム、ハム、ヤペテの三人の子を生んだ。 6：11 時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた。 6：12 神が地を見られると、それは乱れていた。すべての人が地の上でその道を乱したからである。 6：13 そこで神はノアに言われた、「わたしは、すべての人を絶やそうと決心した。彼らは地を暴虐で満たしたから、わたしは彼らを地とともに滅ぼそう。 6：14 あなたは、いとすぎの木で箱舟を造り、箱舟の中にへやを設け、アスファルトでそのうちそとを塗りなさい。 6：15 その造り方は次のとおりである。すなわち箱舟の長さは三百キュビト、幅は五十キュビト、高さは三十キュビトとし、 6：16 箱舟に屋根を造り、上へ一キュビトにそれを仕上げ、また箱舟の戸口をその横に設けて、一階と二階と三階のある箱舟を造りなさい。 6：17 わたしは地の上に洪水を送って、命の息のある

肉なるものを、みな天の下から滅ぼし去る。地にあるものは、みな死に絶えるであろう。
6：18ただし、わたしはあなたと契約を結ぼう。あなたは子らと、妻と、子らの妻たちと共に箱舟にはいりなさい。 6：19またすべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二つずつを箱舟に入れて、あなたと共にその命を保たせなさい。それらは雄と雌とでなければならぬ。 6：20すなわち、鳥はその種類にしたがい獣はその種類にしたがい、また地のすべての這うものも、その種類にしたがって、それぞれ二つずつ、あなたのところに入れて、命を保たせなさい。 6：21また、すべての食物となるものをもって、あなたのところにたくわえ、あなたとこれらのものとの食物としなさい。 6：22ノアはすべて神の命じられたようにした。

(つづく)

3月3日「契約と祝福(2)」

旧約聖書(1955年口語訳旧約聖書)創世記第17章のアブラハム(アブラム)との契約では次のようにある。

17：1アブラムの九十九歳の時、主はアブラムに現れて言われた、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。 17：2わたしはあなたと契約を結び、大いにあなたの子孫を増すであろう」。 17：3アブラムは、ひれ伏した。神はまた彼に言われた、 17：4「わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは多くの国民の父となるであろう。 17：5あなたの名は、もはやアブラムとは言われず、あなたの名はアブラハムと呼ばれるであろう。わたしはあなたを多くの国民の父とするからである。 17：6わたしはあなたに多くの子孫を得させ、国々の民をあなたから起そう。また、王たちもあなたから出るであろう。

17：7わたしはあなた及び後の代々の子孫と契約を立てて、永遠の契約とし、あなたと後の子孫との神となるであろう。 17：8わたしはあなたと後の子孫とにあなたの宿っているこの地、すなわちカナンの全地を永久の所有として与える。そしてわたしは彼らの神となるであろう。 17：9神はまたアブラハムに言われた、「あなたと後の子孫とは共に代々わたしの契約を守らなければならない。あなたがたのうち 17：10男子はみな割礼をうけなければならない。これはわたしとあなたがた及び後の子孫との間のわたしの契約であって、あなたがたの守るべきものである。

旧約聖書(1955年口語訳旧約聖書)出エジプト記第20章のモーセとの契約では次のようにある。

20：1神はこのすべての言葉を語って言われた。 20：2「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。 20：3あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。 20：4あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。 20：5それにひれ伏しては

ならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものは、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、 20：6 わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう。

このように神（主）との契約を守ることがアブラハム、イサク、ヤコブの祖孫であるイスラエルびとが祝福され、繁栄すると繰り返し書かれている。なぜ、ユダヤ人はこのような書（旧約聖書）を書き遺したのであろうか？当時のカナンの地（現イスラエルやパレスチナ）は交通や交易の要であり、この地を支配することが繁栄することであり、民族や国々が立ち替わり、この地を支配した。このためにユダヤ人は幾度なく亡国し、放浪の民となった。

人類最古の文明であるシュメールは紀元前5000年前頃から現イラクとクウェートとのチグリス川とユーフラテス川の間で栄えた。旧約聖書の作者であるユダヤびとはこのシュメール文明から多くを学んでいる。私は若いときこの辺を訪ねたことがあり、その時の記憶と印象を重ねながら、人類の英知の書である旧約聖書の成り立ちに迫り、私なりに彼らの知恵を使わせてもらうことにする。

（つづく）

3月4日「契約と祝福（3）」

シュメール人は紀元前5000年紀には天水農法から灌漑農法を考案し、農業革命を起こし、農業能率と農業収益を実現した。この頃をウバイト文化期と呼ぶ。その次の期をウルク文化期（BC3500～3100）と呼び、都市文明が始まった。この期に円筒印章や煉瓦が登場した。BC3200年には世界最古の文字がこのウルク（現在のイラク南部のサマーワ）で生まれ、紀元前2500年頃には楔形文字に整理され完全な文字体系になった。

シュメール人は複数の神を崇拝した。神は彼らに奉仕される目的で粘土から人間を創造したと考えていた。また、宇宙はスズ製のドームに囲まれた平らな円盤から構成されていると信じていた。土地の測量や、建築のために数学が不可欠だったので数学が発達し、60進法を考えた。それが現在の時刻の基になっている。さらにシュメール人は1週間が7日であることも決めている。このようなことが旧約聖書の創世記に表れている。

シュメール人が賢い事は

- ① 世界最古の物語（ギルガメッシュ叙事詩）をかなりの知性を持って書いている。ギルガメッシュ叙事詩の写本が19世紀にアッシリア遺跡から発見された。それが紀元前二千年紀初頭に作成された写本であることが分かっている。この物語の主人公であるギルガメッシュは紀元前2600年ごろ、シュメールの都市国家ウルクに実在したとされる王である。この物語の特徴は友情の大切さ、教育の大切さ、自然と人間の対立、死への恐怖から不老不死の薬草を求めるなどである。旧約聖書の創世記のノアの箱舟の部分はギルガメッシュ叙事詩の大洪水をそっくり引用している。
- ② 世界最古の法律を作っている。

紀元前2350年頃の初代ウルナンム王、あるいは2代目シュルギ王の時代のウル第3王朝で世界最古の法典である「ウルナンム法典」が記された。この法典の特徴は「損害賠償」に重点が置かれていた。

(つづく)

3月5日 「契約と祝福(4)」

ウル第3王朝の王は神殿や聖塔を作った。この神殿がバベルの塔の原型と言われている。また、何階層にも分化して官僚制をしき維持したが行き過ぎた官僚主義は過度の中央集権化を招き、地方分権は形骸化した。この王朝の最後の王のとき飢饉がおこり、ウル第3王朝が崩壊した。一昨年の大不況を発端とした中央官僚政治に国民が嫌気し、自民党政治が崩壊したことに似ている。ウル第3王朝が崩壊して、北部のイシン王国と南部のラルサ王国とに分裂した。

これら王国は200年ほど平和と抗争が続いた後にラルサ王国がイシン王国を征服したが西方から侵入したアムル人がこの地を征服し、古バビロニア王国を建国した。第6代の王ハンムラビ(在位前1792頃～1750頃)が即位したとき、ハンムラビ法典を発布した。

この法典の前文には「国に正義をもたらし、邪悪な者、不正をおこなう者を滅ぼし、強き者が弱き者を虐げないように、太陽のように人々の上に輝き、あまねく国土を照らし、人々の生活をよくするため」と書かれ、後文には「国土に繁栄をもたらし、家庭での安全を保障し、かき乱す者を許さず、王の保護のもとで、平和に暮らす住民を慈しみ、強者が弱者を虐げないように、寡婦や孤児を守るため、正義を国土に示し、論争を収め、すべての負傷者を癒すために、これらの貴重な言葉を石の記念碑に記載させた。永遠に臣民に利益を与え、国土に統治を確立させる」と崇高な宣言をしている。

旧約聖書にある「目には目を」、「歯には歯を」の有名な同態復讐法はここから来ていると思うが、内容に多少違いがある。ウルナンム法典の損害賠償では犯罪は減らないからとハンムラビ王は同態復讐法を制定したと憶測できる。この法典は社会正義を守り弱者救済するのが法の原点であることを述べている。今から3900年弱前に現在の法律と同じ思想であることに驚く。

彼は優れた王であり、このときが古バビロニア王国の最盛期でもあった。彼の死後に衰退し、鉄の製法を持ったヒッタイト人の侵攻により紀元前1595年頃に滅亡する。

(つづく)

3月9日 「契約と祝福(5)」

ここは都内の某小学校の6年生の教室、今日は午前中で授業が終わり、こうへいちゃんは教科書をカバンに入れながら、これから何して遊ぼうかと仲良しのしょうちゃんに声を掛けた。しょうちゃんはその声を聞こえないふりをして、教科書をカバンに入れている。

こうへいちゃんは畳みかけるように新しいゲーム買ったから、それで遊ぼうよとダメ押しした。しょうちゃんはこうへいちゃんの見ながら、たまには勉強や読書しないとね。かーちゃんからも言われているだろ。今日は図書館で本を読むことにしよう。いいね、こうへんちゃん。こうへいちゃんはしぶしぶ行くことにした。

近くの図書館は大きく蔵書は多かった。今日は平日の昼間で利用者もほとんどいなく、どこでも座れたので昨日の雪で覆われた白い庭園の見える窓際にカバンを置いた。そして本を探しに行った。こうへいちゃんはちょっと見栄を張る必要があったので高尚な本を探した。その棚の本は難しい漢字と長い文章であった。探しているうちにひらがなが多く、短い文章の本を見つけた。それは聖書であった。しょうちゃんは探すことなく平家物語を手を取った。二人とも席に着き、真剣に読みだした。

一時間が過ぎようとした時、こうへいちゃんが「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」と書いてあるが意味を教えてと小さな声でしょうちゃんに言った。周りにはだれもいないから普通にしゃべってもいいよとしょうちゃんが普通の声で話を始めた。

古代オリエントでは小麦や大麦を栽培していたので、パンは主食となった。つまり人は食べることで生きるものではないという意味になる。つぎの「神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」は難しいね。こうへいちゃんはかーちゃんやとうちゃんの言葉には従うだろう。こうへいちゃんはばーちゃんやじーちゃんという言葉にはしだうだろう。こうへいちゃんはかーちゃん、とうちゃん、ばーちゃんやじーちゃんがこうへいちゃんを愛していることを知っているからだ。みんな、こうへいちゃんに幸せになってもらいたいと心から思っている。こうへいちゃんの先祖も同じく、こうへいちゃんの幸せを祈っている。聖書ではアダムとイブは人間の先祖と言われ、そのアダムとイブを作ったのが神様と言われている。だから、神様は先祖と同じでかーちゃんやとうちゃんと同じようにこうへいちゃんを愛していることになる。だから、こうへいちゃんは神様の言葉にも耳を傾け、それに従っていきると幸福になれるということなんだ。

古賀先生、羽田先生、松田先生もこうへいちゃんのこと大好きだろう。みんなこうへいちゃんの幸せを祈っている。みんな、こうへいちゃんに元気であることも願っている。これらは総称して祝福というんだ。だから、みんなの言うことを素直に聞くことから始まるんだ。それを聖書では神様との契約と書いてあるんだ。分かった、こうへいちゃん。それとかーちゃんやとうちゃんのこうへいちゃんへの思いを無償の愛という。同様に神様もこうへいちゃんに無償の愛を与えている。神様はすべての人間を無償の愛を持っているということが聖書に書いてある。それが主題なんだよ。愛することは見返りを求めてはならないんだ。すべての人間がこれを理解すれば、すべての人間は祝福され、幸福になれるんだ。

わかったかい、こうへいちゃん。

この物語はフィクションであり、登場人物はすべて架空です。

(つづく)

3月11日 「契約と祝福(6)」

再び、歴史を振り返ることにする。

アブラハムは神から祝福選ばれた最初の預言者でユダヤ教・キリスト教・イスラム教の「信仰の父」と呼ばれている。彼は紀元前3000年頃、メソポタミア文明の発祥の地ウル(イラク南部)でテラの子アブラムとして生まれる。テラ一家はカナンの地(乳と蜜の流れる場所)に移住することを目指し、ウルを出発するが途中のハラン(現在のトルコ南東部のシャンルウルファ県)に定住した。父テラの死後、75歳のアブラムは神の啓示を受け、65歳の妻サライ、甥トロとハランで約束の地カナンへ旅立ち、移り住んだ。

しかし、定住したカナンのネゲブ地方(現在の南部イスラエル)が飢饉に襲われたため、エジプトに避難する。避難したが災難にも妻サライはたいそうな美人であった。サライが自分の妻であることが分かたら自分が殺されることを恐れ、サライに自分の妹と称させた。そしてサライは美人の宿命かエジプト王の宮廷に召し抱えられた。その恩恵でアブラムは大金持ちになる。アブラムの神はサライがファラオの妻にされたことを知り、ファラオに激怒した。その怒りがファラオとその家にひどい災害を与えることとなる。ファラオは神がアブラムの味方であることを知り、アブラム達とその所有物すべてを共にカナンの地に送り出す。カナンに着いた後、アブラムはカナン地方、トロはヨルダンの低地に分かれて住んだ。その後、アブラムは神の指示によりアブラハムに改名させられた。

悲しいかなサライは子供が恵まれないことに悩み苦しんでいた。サライは決心し、その地の風習に従ってサライの女奴隷であるハガルを側女としてアブラハムに与えた。そして、ハガルは妊娠した。妊娠したとたんに奴隷の立場であるにも関わらずハガルはサライを見下すようになった。妊娠できないサライはハガルの屈辱に耐え忍んだが我慢できなくなり、アブラハムに不平不満を漏らした。そうしたら、アブラハムはサライにこの件については干渉しないと伝えた。そうするとサライは溜っていた嫉妬と怒りで、ハガルを散々虐待して追い出した。今から5000年前でも女の嫉妬は今と変わらなく恐ろしいものである。

(つづく)

3月26日 「契約と祝福(7)」

大不況の恐怖に満ちた平成21年度がもうすぐ終わろうとしている。昨夏はシステム開発案件が激減し苦しんだ。暗中模索していると昨秋から闇夜にうっすらと明るさを感じるようになった。さらに、年明けには東の山の向こうが明るくなってきた。もうすぐ夜明けを近い、「太陽よ、闇夜を消しちらし、我々に生きる希望の光を地上に満たしてくれ」と合掌した。

創業から10年を過ぎ、垢が溜ってきた。この瞬間に社内改革を断行し、新しい制度で次の10年を迎えることにした。そこで組織・人事及び給与体系を大胆に変更している。

このような理由で、書き続ける気持ちが湧かなかった。続きを書こう。

神はアブラハムに言った。これからはサライをサラと呼びなさい。サラを祝福する。そしてサラはあなたに男の子を産むであろう。名をイサクとしなさい。私はイサクと契約し、イサクを祝福し、彼の子孫を得させ、大いに増すとアブラハムに言った。

9月6日 「メソポタミアと私」

この以前にユダヤ人が書いた旧約聖書を基に「契約と祝福」を書いていたが、まだ心の中で旧約聖書の教えを十二分に会得して書いていなかった。だから、途中で止まった。経営は哲学し、その哲学を実践することでその経営は価値を持つのである。そのために、儒教の教え、仏教の教え、ユダヤ教の教え、キリスト教の教えを学んできた。しかし、それらは文明や思想が交わってできたものであり、その底流に流れる人間の本質まで理解することには至らなかったという漠然とした不安があった。

そこで、チグリス川とユーフラテス川の間の中積平野で起こった人類最古のメソポタミア文明を学ぶことで漠然とした不安を解消することにした。その文明は最古であるがゆえに他の文明からの影響を受けなかった。それは人間文明の創始であり、その創始者はシュメール人である。シュメール人の遺した文明や文化から彼らの思想を学び、生きる本質を理解したいと思う。



この一枚の写真はイラン・イラク戦争が起こっていた昭和58年冬（当時28歳）にバクダットの南方90 kmにある古代都市バビロン（前3千年紀末に登場する都市で、ここにアムル人がバビロン第1王朝を建設し、前18世紀に第6代の王ハンムラビがメソポタミアを統一した。）で撮ったものである。この後ろはユーフラテス川であり、その当時のイラクといえども冬は寒いことがこの写真で分かる。このような場所でメソポタミア文明は栄えたのである。



また、この写真はイシュタル門で同じ日に撮影したようだ。この門は紀元前575年に

新バビロニア王国の王であるネブカドネザル2世により建設された。青い釉薬瓦で、バビロンの女神イシュタルと共に、シルシュ（ドラゴン）、オーロックスの浅浮き彫りなどが描かれている。この時期が新バビロニアの最盛期であった。紀元前597年にネブカドネザル2世はエルサレムに入城し、ユダヤ人の王エホヤキムを殺害し、約3000人の有力者を捕虜としてバビロンに拉致した。

また、紀元前586年エルサレムは破壊され、ゼデキヤ王以下ユダヤ人たち（約10万人）はバビロンへ連行された。これをバビロン捕囚という。これらのユダヤ人はイシュタル門の建設に従事させられたであろうし、このイシュタル門を見たであろう。ユダヤ人がバビロンを相当に恨んでいたであろうことは想像できる。このバビロン捕囚のとき、ユダヤ人は結束が固まったと言われ、また旧約聖書が完成させたともいわれる。

次回からシュメール文明について書きたいと思う。

9月13日 「ブラックホールとシュメール人の冥界（1）」

天文学で最近最も関心があるのがブラックホールとブラックマター（ブラックエネルギー）である。人類が地球温暖化で滅亡するかもしれないが、その前に隕石の衝突や恒星の爆発で滅亡するかもしれないことが最近の天文学で明らかになっている。ちょっと、横道にそれるが、私は宇宙については関心があるので、そのことも紹介したい。2004年6月19日にキットピーク国立天文台でロイ・カッターらにより、小惑星が発見された、その小惑星をアポフィスと命名した。そのアポフィスが2032年に地球に接近する。それが人工衛星に複数衝突すると、軌道変更して地球に衝突するかもしれないと議論の衝突もあった。アポフィスの直径が390mで質量が 7.2×10^{10} kgでそれが衝突すると人間を含む生物が大量絶滅すると言われている。アポフィスは2032年から2103年までに地球に6回接近すると予測されている。その頃までには核爆弾を搭載したロケットでアポフィスを軌道修正ことは可能になっているだろう。

オリオン座のベテルギウスは太陽系から640光年と近い、そのベテルギウスがいつ超新星爆発をおかしくない赤色超巨星である。ベテルギウスが超新星爆発を起こすと、その爆発の方向が地球に一致するとガンマ線バーストでオゾン層を破壊して陸上動物が絶滅するかもしれないと唱える学者もいる。天文学が発達することが宇宙を知るロマンから人類を救う科学に変わっていることも理解する必要がある。

（つづく）

9月14日 「ブラックホールとシュメール人の冥界（2）」

最近の天文学でブラックホールの生成についてかなり分かってきているが、ブラックホール自体のことは分かっていない。その理由はブラックホールの内部には時間と空間が存在しなく、人間の考える現在の物理学では説明できないからである。ブラックホールは大きな恒星が死んだ後に発生する天体である。ブラックホールの特徴は1. 大質量の恒星が水素の核融合を繰り返し、その恒星の中心が鉄になり、その寿命の最後に超新星爆発を起

こし、自己重力によって極限まで収縮することで生成する。2. 光が抜け出せない暗黒の世界である。3. ブラックホールの境界内では時間と空間が存在しない。4. ブラックホールは物質を飲み込む。5. 宇宙のすべての銀河の中心にはブラックホールがあり、これが宇宙を進化させている。例えば、地球がブラックホールに飲み込まれるとその大きさは直径5 cmのゴルフボールと同じくらいになる。ブラックホールは宇宙の冥界であろう。

人類最古の文明を作ったシュメール人は死後に行く世界（冥界）を次のように考えていた。シュメール人の冥界はイシュタル（美の女神）の姉のエレシュキガルが治めている戻ることのできない土地で死者の世界である。その特徴は1. 入る者は出ることのない家へ、2. 歩み行く者は戻ることのない道へ、3. 住み者は光を奪われる家へ、4. そこでは埃が死者の御馳走、粘土が彼らの食物で、5. 光を見ることもなく、暗闇のうちにすむ6. 鳥のように翼のついた着物を身につける、6. 冥界の門のうへ、かんぬきのうへには土埃が積もる。これは「イシュタルの冥界下り」の神話に書かれている冥界の様子である。

また ギルガメッシュ叙事詩の中にもまったく同様な冥界の様子が書かれている。このようなことから彼らの死後の世界はあまり楽しくないようだ。このことから彼らには善と悪の概念が存在していなかったのだろう。また、シュメール人は生きることに執着していたことも想像できる。

宇宙のブラックホールの存在は善も悪もなく、シュメール人の冥界にも善と悪がない。

9月15日 「シュメール人の幸福感」

ギルガメッシュ叙事詩（シュメール語版の編纂は紀元前三千年紀に遡る可能性がある）の中で、ウトナピシュティム（生命を見た者）がギルガメッシュ（紀元前2600年ごろのウルクの都城の王）に語っているところで当時の平均的な幸福感が分かる。

ギルガメッシュよ、あなたはどこまでさまよいいくのです

あなたの求める生命は見つかることがないでしょう

神々が人間を創られたとき

人間には死を割りふられたのです

生命は自分たちの手のうちに留めておいて

ギルガメッシュよ、あなたはあなたの腹を満たしなさい

昼も夜もあなたは楽しむがよい

日ごとに饗宴を開きなさい

あなたの衣服をきれいになさい

あなたの頭を洗い、水を浴びなさい

あなたの手につかまる子供たちをかわいがり

あなたの胸に抱かれた妻を喜ばせなさい

それが人間のなすべきことだからです

新宮秀夫氏の幸福について私は共感するので、彼の幸福の段階を紹介する。

第一のステージ 富、名声、恋、スポーツ、食事などを通じて快樂を得ることに幸福を感じる。

第二のステージ 獲得した快樂を永続させようとするいとなみの中に幸福がある。

第三のステージ 苦しみや悲しみを克服するいとなみの中に幸福がある。

第四のステージ 克服できない苦しみの中に、幸福がある。

これとシュメール人の幸福を重ねると、彼らはすでに第二のステージの生き方を考えていたことになる。さらにギルガメッシュは第三のステージ以上の幸福の段階にいたことになる。紀元前2000年頃、このような幸福感をシュメール人が持っていたことに驚く。

以上

9月21日 「シュメール人のエロティシズム」

先日、ある生物学の先生の講演を聞いている中で、人間と他の哺乳動物の違いで、人間には体毛がない、人間のペニスには骨がないなど違いがあると聞いた。なぜ人間のペニスには骨がなくなったのだろうと思ったが、調べるのにも時間がかかるので理由は不明とする。私は脳の発達に関係し、子孫の遺す行為は当然だが、快樂を求めるために骨を退化させ海綿体を発達させてのではないかと憶測する。

今から4000年前のギルガメッシュ叙事詩の中で、遊び女（神聖情婦）がエンキドゥを誘惑する行が現在のストリップ嬢の動きに似ていることに興味をそそった。

ところで、遊び女は、この山男を見た
野原の奥から来た、この野蛮な男を
「彼がいる、遊び女よ、胸元をゆるめよ
奥所を開き、彼にお前の魅力をとらえさせよ
ためらうな、彼の心を受けとめよ
お前を見ると彼はお前に近づくだらう
お前のうえによこたわれるように着物を脱ぎすてよ
野で育った獣たちは彼をみすてるだらう
彼の気持ちはお前にひかれてゆくだらう」

.....

六日と七晩、エンキドゥは遊び女と交わった

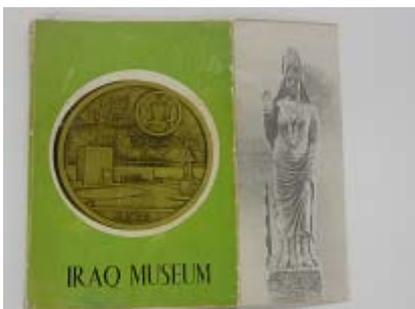
遠い昔も今も変わらないエロティシズムにシュメール人の知性を感じた。

9月24 「イラク博物館（1）」

イラク博物館はバグダート市内にあり、人類最古のメソポタミア文明の遺物では当然世界一のコレクションが収蔵されている。しかしながら、イラク国民ならず、人類の至宝が2003年のイラク戦争の騒乱に乗じた密売目的で1万5000点の像などが略奪された。その後国内外で発見させた約6000点が返還されたが今なお約7000点が行方不明になっていると報道されている。メソポタミア文明に少しでも興味を持ってもらうためにも、昭和59年にイラク博物館で購入した博物館のガイドブックに掲載されている大変貴重な歴史的遺物をここで紹介したい。



この写真は当時（昭和58年の冬）のバグダート市内の様子である。私の写っている周囲には煉瓦が散乱している。この写真のことをよく思い出せないので断言できないがこの辺に爆弾（イラン・イラク戦争中）が落ちたように見える。



この本はイラク博物館のガイドブックであり、初版が1966年で、改定が1972年になっている。



この紙片はこのガイドブックを購入したときの領収書であろうが、アラビア文字で書かれているので何が書いてあるのかさっぱり分からない。

(つづく)

9月27日 「イラク博物館（2）」

人類は700万年前にアフリカの熱帯雨林に住むチンパンジーから別れ、人熱帯雨林から二足歩行で草原に出ていくが、チンパンジーとは違い動物を食べることで脳が発達したと言われている。人類が石器を使ったのは250万年前でそれからを旧石器時代という。前期旧石器時代（Lower Paleolithic、250万年前～12万年前）ハンドアックスがひろく用いられた時代。この時代の人類はホモ・ハビリスおよびホモ・エレクトスが主流であった。

中期旧石器時代（Middle Paleolithic、30万年前～3万年前）剥片石器が出現した時代。ネアンデルタール人が広がった。

後期旧石器時代（Upper Paleolithic、3万年前～1万年前）石器が急速に高度化、多様化した時代。このような技術革新の原動力を言語に求める説もある。クロマニヨン人（ホモ・サピエンス）が主流となり、他の化石人類は急速に姿を消した。

現人類をホモサピエンスというが、他の化石人類は姿を消した。それはその当時、気候変動が起こり、食料不足で絶滅したのではないと言われている。なぜ、ホモサピエンスだけが生き残ったのか？それは、長い笛は音色が多いのと同じに、ホモサピエンスの喉は長く、発生できる母音が多く、言葉を巧みに使いこなしたことで生き残ったと考えられている。



これは10万年前のイラク・キルクーク【Kirkuk, 都市】のチャンチャマル【Chamchamal, 都市】近くに位置するバラダ【Barada, 川】から出土した旧石器時代の石斧である。これを使ったのがネアンデルタール人かホモサピエンスかわからないがこれを使って狩猟していたのであろう。

(つづく)

9月29日 「イラク博物館（3）」



これは紀元前6000年の、テル・エッ・サワン【Tell es-Sawwan, 遺跡】から出土した2つの大理石の小立像である。



これも紀元前6000年のテル・エッ・サワン【Tell es-Sawwan, 遺跡】から出土した、地母神を表している2つの大理石の小立像と、裸の男性の姿を表している、彩色した粘土から作られたもう1つの像である。



これは象眼された目の、地母神を表す雪花石膏の小立像で、そのうち2体はターコイズのネックレスを身に付けている。テル・エッ・サワン【Tell es-Sawwan, 遺跡】から出土した紀元前6000年のものである。

紀元前6000年頃から紀元前5000年のメソポタミアはハッスーナ文化期と呼ばれ、灌漑農業が行われ、小麦、大麦が栽培され、羊、牛、豚などの家畜が飼育された。このような像を大理石や雪花石膏で余裕と豊かさがメソポタミアにあった。また、多産、肥沃、豊穰をもたらす地母神を作っていることから自然発生的に神信仰は始まったのであろうか？しかし、この頃には未だシュメール人はいなかった。

(つづく)

10月7日 「イラク博物館(4)」

2007年の世界のビールの消費量は1億7552万キロリットル、大びん633ミリリットル換算で2773億本になる。地域別ビールの消費量では中国、アメリカ、ロシア、ブラジル、ドイツの順で日本は7番目である。ビールは世界中で良く飲まれている。

人類最古の酒はワインで紀元前6000年頃にメソポタミアで作られ、ビールも紀元前5000年頃のメソポタミアでビールパンに水を加えると自然発酵することから偶然発見された。シュメール人はビールを大変好んで飲んだようだ。



これは古代ウルク市から出土されたことから、「ウルク出土の大杯」と呼ばれ、シュメール美術の代表的傑作である。外周に浮彫で宗教的儀礼の図像が彫って、イナンナ女神の神殿に一对で納められ、この大杯の中にお神酒としてビールが注がれた。メソポタミアが大変豊かな土地であり、シュメール人が高度な文明・文化を持っていたことを理解でき、我々もシュメール人の知恵の恩恵にあずかっている。

10月8日 「イラク博物館（5）」

シュメール人は、遙かな古代、どこからともなくメソポタミアの地に姿を現し、何の手本もなしに、独力で人類最初の文明を築き上げ、今から4000年前、突然その姿を消してしまった。シュメール人の正体は未だ考古学の謎である。



この像のことをガイドブックには次のように紹介している。テル・アズマー【Tel Asmar, 古代の土手】にある正方形の寺院から出土した2つの像で、おそらく

神アブ【A b u, 植物の神】とその妻を表している。(紀元前2500年の第三王朝時代)しかしながら、これは神ではなく、シュメール人そのものである。

シュメール人の人種的特徴は目が大きく鼻も大きく、身長は高からず、つぶらな瞳で、髪の色は黒いという。男性は剃髪し、髭を生やし、羊毛の房が舌状になったカウナケスと呼ばれる腰巻を巻いている。女性像には胸を露にすることはなく長い衣服を着ている。



これは紀元前4000年期のウバイド時代の豊穡の女神を表す赤土焼の小立像で、ウル【U r, 古代シュメール人の都市】から出土した。この女性像には可愛さは微塵もない。これを良く見ると女性の下半身に三角形の布が巻かれている。ウバイド時代からウル王朝時代までに織物技術が発達したことをうかがわせる。

10月12日 「イラク博物館(6)」

私は毎日、印鑑を使っている、多くの日本人も印鑑を持ち、使っている。個人では実印、銀行印、認印、会社では代表印、社印、銀行印 他には職印、公印、落款印、訂正印がある。その材質は象牙、水牛の角、羊の角、柘植、国檀、瑪瑙、琥珀、金、チタン、プラスチックなどがある。日本での最古の印は西暦57年ころの「漢委奴国王」の金印であり、中国では戦国時代(紀元前403年～紀元前220年)の印章が確認できている最古である。

メソポタミアでは紀元前7000年期後半の時代のスタンプ印章が発見されている。驚くべきことである。印章と文字の発展には深く関連がある。メソポタミアでは灌漑農業が発達し、大麦、ヒヨコマメ、ヒラマメ、雑穀、ナツメヤシ、タマネギ、ニンニク、レタス、ニラ、辛子を栽培していた。また、牛、羊、山羊、豚を飼育していた。このようにメソポタミアは大変豊かであった。狩猟から農耕に変化すると集落ができ、その収穫した穀物などは一か所に集められた。その後集落民に分けられてと考えられている。

収穫した物や家畜などを管理するために、トークンが生まれた。最古のトークンは紀元前8000年ころのものである。トークンとは粘土の小さな塊(円錐、円盤、球、棒の形)で表面には種類(羊、牛、犬、パン、油)などを表し、塊で数を表した。それらのトークンをブッラという粘土製の球形容器に入れて、収穫した穀物を数量にして記録した。そして、そのブッラに封泥するために印章が使われた。また、取引や契約の証としても使われた。時代が過ぎ、都市化が進み交易が多様化するとブッラの中身をブッラの表面にトーク

ンを押すようになった。それが簡単に粘土版に葦で書けるように直線的な楔形文字が発明された。文字は印章の発達は在庫管理であり、受発注管理であり、印章は認証として発達したのである。実益で文字が発達したのは大変興味深い。

初期の印章は我々の印鑑と同じであったが、粘土版にころがして鮮明な印影で認証するようになってから、円筒印章になった。



これは紀元前2500年の第三王朝時代の円筒印章とそれを押してできた図であり、ウル【Ur, 古代シュメール人の都市】から出土したもので、宴会を表している。

印章がシルクロードから他の交易品とともに中国に伝わったのであろうが、その事実を示す考古学的資料は未だ発見されていないが、将来、中東から印章が中国に伝わった証拠が見つかるかもしれない。こんなロマンを想像するのも楽しい。

10月22日 「イラク博物館（最後）」

今回でイラク博物館は最後です。

神と人間の関係にどのようなものであったのか？メソポタニアは大変豊かな土地で作物の収穫は大いに満足するものであっただろう。だからこそ、彼らは自然災害を恐れて、初期の頃は地母神を作り、五穀豊穰を祈った。何時の時代でも頭の良い人間はいるもので、自然現象である自然災害は神の怒りではないかと思うようになった。そんな人たちが神を想像し、神を創造したのではないのか？神が存在するならば、神に祈り、五穀豊穰を神に願った。それが神官を作り、神殿を作り、しだいに組織化されて、権力の集中となる都市国家に発展した。さらには権力集中の頂点である王を作り、王朝時代に発展したと私は考える。

シュメール人は、神々に奉仕させるために粘土から人間を作ったと信じていた。また、人間が神に服従するために死を与えたとも考えていた。だからこそ、地震、雷、台風、干ばつなどの自然災害や疫病は神の怒りと考え、天上にいる神々に神殿を作り、神の家族を住ませ、収穫物を奉納し、祈ることにより神の怒りを鎮め、自然災害などが起こらないことを祈った。面白い事にシュメール人は人間同士の戦争を神が人間の人口抑制に使ったとも考えていた。それはギルガメッシュ叙事詩の中でギルガメッシュとエンキドゥが森の守護神フンババを殺し、森のレバノン杉をすべて切ったとの記述から人口爆発が問題であったことを示している。



これは紀元前4000年期末期のウーカ時代のウカイア【U q a i r】にある神殿の模型である。

古代メソポタミアでは神殿のことをジググラドと呼ぶ。旧約聖書の「バベルの塔」はバビロンに捕囚されていたユダヤ人がバビロンにあったジググラドを基に伝説化したものである。

これは私がイラクのサーマッラーに訪ねたときに撮影したマルウィヤ・ミナレットである。これはアッバース朝第8代カリフのムウタスィムがサーマッラーに建築したサーマッラーの大モスクに付随している螺旋式のミナレットで、イラクで最も重要な遺跡の1つとされ、イラクの至宝と評されている。このミナレットは西暦849年から建築が始まり、西暦852年に完成した。これは古代メソポタミアのジググラットに由来すると考えられている。また、2007年に「サーマッラーの考古学都市」としてユネスコの世界遺産に登録された。西欧人はこれを旧約聖書の「バベルの塔」と考えていた。

これはマルウィヤ・ミナレットの螺旋階段を登り、頂上から撮影した風景である。昭和58年から59年にかけてイラクに滞在したことが貴重な体験であり、私のその後の人生観に大きく影響したことを改めて感じる。

(完)

10月25日 「シュメールに学んだこと(1)」

人類文明の発祥の地であるメソポタミア文明を勉強した。そして、その文明の中核であったシュメール人とシュメール文明について学び、生きることの本質を考えた。

- 1) 神が人間を創ったのではなく、人間が神を創った。
- 2) すべての現象には始まりがあり、終わりがある、また万物には生と死がある。
- 3) 多くで言われている死後の世界である天国や地獄はまったく存在しない。極楽浄土はこの世にしか存在しない。今生きていることこそが幸福である。不幸は存在しない。

なぜ、人間は神を創ったのか？

地球上のすべての生物は必死に生きるようにプログラムされている。それは生物の営み

を調べれば、分かることである。生物は生きる方向に地球の環境変化や生物の多様性に応じて進化してきた。そして、必死に種の保存に努めてきた。人間も同様に環境変化に応じて、知能が発達してきた。人間は狩猟生活から農耕生活に移ると劇的に食物を安定して確保できるようになり、人口が増えるようになった。食物の安定確保は人間に思考する余裕を与えた。しかし、地震、台風、雷、豪雨による洪水、干ばつなどの自然災害と疫病などには無力で死の恐怖に怯えた。だからこそ、目に見えない恐怖は何者かが発生させていると考えたのは自然なことであろう。それは自然現象や人間をも監視制御できる者の存在がいると考え、それを神と呼んだ。神はあらゆるものに宿る（八百万の神）と考えていた。シュメールでの重要な神々は深淵の神 アブス、天神（最高神）アン、女神 キ、大気の新 エンリル、水の神 エンキ、月の神 ナンナル、太陽神 ウトウ、地母神 ニンフルザク、愛の女神 イナンナ、暴風と戦の神 エンリル、火神 ギビル、野生動物の神 シャカンなどである。このように人間にとって重要な神を祭り、その神の怒りを鎮めることが死の恐怖から解放させることであった。それが何時の間にか全知全能の神が生まれ、その神と契約すれば祝福され幸福になれると思うようになった。それがユダヤ教であり、ユダヤ教に派生したキリスト教やイスラム教も同じである。

一方、仏教では生きることは煩悩から解放される悟りの境地に至るがために修行することであると考えている。仏とは悟りを開いた人、菩薩は悟りを開くために修行している人となっている。つまり、すべての幸福になりたいと願う人は菩薩と言える。貴方も菩薩であり、私も菩薩なのである。仏や菩薩に祈っても幸運や幸せはこない。仏教の教えの本質は「苦」を知り（四諦）、苦しみから解放する生き方（八正道）を学び実践することである。（つづく）

10月26日 「シュメールに学んだこと（2）」

すべての現象には始まりがあり、終わりがある、また万物には生と死がある。どのようなことか？

現象のすべてには始まりと終わりがある。

太陽が昇ると光が満ちる昼になり、太陽が沈むと暗黒の夜になる。

雲が発生すると雨になり、雲がなくなると雨は止む。

台風が来ると風が吹き、台風が去ると風は止む。

地震が起きると大地は揺れ、地震が止むと大地は静かになる。

潮が満ちると海は深くなり、潮が引くと海は浅くなる。

月が満ちると満月になり、月が欠けると新月になる。

雷雲が発生すると雷が響き、雷雲が動くと雷も動く。

雨が降ると池に水が満ち、干ばつになると池の水は干上がる。

枯れ木に火が点くと燃え、枯れ木がなくなると火は消える。

風が吹くと海は荒れ、風が止むと海は穏やかになる。

10月29日 「シュメールに学んだこと（最終）」

多くで言われている死後の世界である天国や地獄はまったく存在しない。極楽浄土はこの世にしか存在しない。今生きていることこそが幸福である。不幸は存在しない。何を言わんかである。

現在の人間は天国と地獄が存在すると信じている人が多い。それは様々な宗教に依存したことであろう。宗教には善と悪が存在し、善行した者は天国に昇り、悪行した者は地獄に落ちると考えている。シュメール人は天上には神が住み、人間が死後に行く冥界は地の下にあると考えていた。人間は死んだら、地の下にある暗黒の二度と戻れない冥界に行き、粘土を食べる所と死後の世界を観ていた。なぜそう思ったのか、私には分からない。

肉体は滅びても魂は残るという来世・復活信仰の考え方は古代エジプトのミイラ作りなどに見られる。私はこの思考は半分正しいと考える。己の肉体は滅びるが子供をつくることで自分の遺伝子が先祖の情報とともに子孫に引き継がれる。これこそが来世であり、魂の復活なのである。

現世こそが天国であり、楽園である。なぜなら、真の幸福はあらゆる試練や困難を克服する努力や行為の中に存在するからである。大きな試練や大きな困難を超えたとき至上の幸福を感じるからである。試練や困難のない変化のない人生は退屈で、これこそが地獄なのである。だからこそ、試練や困難の中に入り、それらを克服することである。空海が「山川は長くして萬世也、人は短くして百年也」と言っているように人生は非常に短い。その人生を如何に豊かに過ごすかである。それには大きな夢とか大きな目標を持ち、生きることである。大きな夢には大きな試練・困難や険しい道が待っている。それを一つ一つ諦めないで超えて行くことで、自然と真理の門に辿りつく。それを仏教では悟ると言うのである。

シュメール人は神が自分たちに奉仕するために人間を作ったと考えていた。これは大変重要である。人間は奉仕の心で生きると苦しみから解放される。自分の為に生きる人は欲が深く、煩惱から解放されない。人の為に生きる人は欲が浅く、煩惱から解放される。人生で最も良い生き方は人の為になる大きな夢を持って、それを死ぬまで貫くことである。そうすれば、その人は極楽浄土を知ることができる。

(完)

11月1日 「シュメールに学んだこと（最終の追記）」

前回は最終としたが、言い忘れたことがあるので追記する。私は神の存在を否定するが宗教そのものを否定しない。旧約聖書を読み、ユダヤ人を苦悩の歴史を知り、貧困や病気で苦しむ人を見て、その苦しみから解放させてあげたいと願うイエス・キリストは立派であり、その教えであるキリスト教も素晴らしい。イスラム教も同様である。仏教や儒教の教えに学び、人として生きることを学んだ。実にすばらしい宗教である。また、日本の神

道を否定するものではないことを明言する。

ただ、神仏に祈るだけで幸福になれるという教えは断じて否定する。神仏に祈る行為は謙虚であり、人間の傲慢を否定することで良いことである。また、神仏に祈り、生きていくことへの感謝の意を表すのは大変良い事である。このような行為は善であると考え。しかし、単に神仏に祈るだけで幸福になれるとか宗教に多額の財産を寄付すれば幸福になれると言った教えは極めて悪意のあることである。

私たちが最も大切にしなければならないのは両親への敬意と感謝である。また、自分の先祖に対する敬意と感謝である。このことを毎日心に刻み、暮らすと心が豊かになる。どんな困難や試練に当たろうがそれを克服できる。どんな苦しみがあるにしてもそれを解決できる。なぜなら、36億年という遠大な時間の間生きてきた、また多くの試練を克服した記憶が我々の遺伝子情報の中にあるからである。先祖は我々の体内に存在するのであって、お墓の中にはない。だからこそ先祖に敬意と感謝を込めて、生きることである。そうすれば、いかなる困難、いかなる試練、いかなる苦しみをも克服した先祖の魂が自分の言動に力を与えてくれるのである。幸福への近道は両親や先祖に対する敬意と感謝に満ちた暮らしをすることである。

(完)